

第2回足立区区民評価委員会会議録

日 時 平成29年4月19日(水曜日)

場 所 足立区役所 中央館8階特別会議室

第2回足立区区民評価委員会会議次第

日 時 平成 29 年 4 月 19 日（水曜日） 午後 1 時 59 分から午後 3 時 35 分

場 所 足立区役所中央館 8 階特別会議室

出席者 区民評価委員会委員（14 名）

田中隆一会長、石阪督規副会長、遠藤薫委員、沼尾波子委員、笠間美伸委員、金子正委員、瀬田章弘委員、田島のぞみ委員、中島明子委員、三石美鶴委員、村田文雄委員、森泉孝行委員、矢野毅委員、山崎千枝委員

区側出席者

政策経営部長、政策経営課長、財政課長、経営管理担当（2 名）、財政担当（2 名）

- 議題等
- 1 基本構想のキーワード～協創～について（資料 1）
 - 2 会議の傍聴等について（資料 2）
 - 3 今後の開催日程について（資料 3）
 - 4 分科会の日程および進行の調整について

- 資 料
- 資料 1 「協創」の推進に向けて 足立区の地域課題解決のために
 - 資料 2 足立区区民評価委員会条例施行規則
 - 資料 3 今後の開催日程について
 - 資料 4 平成 29 年度足立区区民評価委員会分科会名簿

午後1時59分 開会

事務局(政策経営課長) それでは、皆様おそろいでございますので、定刻前でございますけれども、ただいまより第2回区民評価委員会を開催させていただきます。先週13日の第1回の全体会に引き続きまして、お忙しい中をお越しいただきまして、ありがとうございます。

それでは、きょうの進行は最初から会長にお任せしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

田中会長 皆さん、こんにちは。ただいまより第2回足立区区民評価委員会を始めたいと思います。

お手元に配付いたしました会議次第に沿って議事を進めてまいります。先週の第1回全体会のときにご欠席でありました沼尾委員と三石委員に簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。では、沼尾委員、お願いいたします。

沼尾委員 改めまして、皆さん、どうもこんにちは。昨年まで日本大学にいたのですが、この春から東洋大学に移りました沼尾と申します。専門は自治体の財政でして、去年は暮らし分科会のほうを担当させていただいたのですが、今年は一般事務事業のほうにシフトということで、ちょっと寂しいところと、新しいところを楽しみだなというところもありまして、引き続き頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

三石委員 皆さん、こんにちは。昨年に引き続きまして区民評価委員をさせていただきます三石と申します。帝京科学大学で小学校の教員や幼稚園の教員、保育士を目指す学生たちの指導をしております。昨年度、評価の方法について勉強したのですが、半年たったので覚えているかどうか心配なところですが、私は生まれ育ちが足立区なものですから、区民ファーストの視点で、よりよい行政になっていただけるような評価に努めたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

田中会長 どうもありがとうございました。

それでは、次第に沿って進めてまいりたいと思います。

1 基本構想のキーワード～協創～について(資料1)

田中会長 まず初めに、第1回の全体会でも話が上がりましたが、次第の1、「基本構想のキーワード～協創～について」、事務局から説明をお願いいたします。

事務局(政策経営課長) それでは、次第の1でございますけれども、本日は、区民評価委員会の今後の活動に当たりまして、29年度から新しい足立区の基本構想の新しい経営理念になります「協創」について少しご理解をいただければということで、ミニ講演会のような形で予定してございま

す。

講師については、石阪委員からお話をいただくのですが、石阪委員は、基本構想の策定に当たりまして、27年度、基本構想審議会というものを足立区で立ち上げまして、そのときの学識委員にもなっていていただきまして、「くらし」の専門部会でも部会長としてご活動いただきました。それだけでなく、28年度の1月にシンポジウムを開催した際にも、そのシンポジウムのコーディネーターとして石阪委員にいろいろお世話になったところがございます。きょうは先生から、足立区のこれまでの「協働」という考え方から新しい「協創」ということで、その考え方の、「協働」と「協創」の違いなども含めてご講演いただきたいと考えて、こういったテーマで用意させていただきましたので、どうぞよろしくお願いいたします。

田中会長 それでは、石阪委員、よろしくお願いいたします。質問やご意見は、一番最後に時間を少しとりますので、そのときにお願いいたします。

石阪副会長 それでは、僕はここに座って、こういう形でお話しさせていただきます。僕の顔は見なくて構いませんので、向こうのパネルを見てください。お手元に簡単にまとめた資料がありますけれども、内容はほとんど向こうと一緒にしますので、あちらを見て説明させていただきます。大体30分ぐらいで、その後、質疑応答をとらせていただくということになります。

冒頭でもご紹介いただいたとおり、基本構想が昨年度できました。そのときにはお隣の田中会長もメンバーに入っていました。「協創」という言葉がそこで生まれた。

この間、広報でも足立区の皆さんには「協創」という言葉が流れていったと思うのですが、中身となると意外に皆さん、「協創」って一体何だろうか。いろいろな考え方が多分あると思うので、今日はちょっとこの「協創」、恐らくこれからの10年、20年、足立区の中での1つのキーワードになる言葉ですので、これについて皆さんと一緒に考えてみたい。

1月にはシンポジウムがあったのですが、この中のメンバーにもいる瀬田委員には、そのパネルディスカッションの際にはメンバーに入っていていただきまして、「協創」について議論を深めたということです。この区民評価の中でも、「協創」という考え方に基づいて、我々、足立区の指標を見ていく必要があるだろうということで、今日は最初に30分とらせていただきまして、お話をさせていただきます。

まず、今日の内容ですけれども、「足立区の地域課題」、「足立区基本構想とは」、「協働」から「協創」へ、「協創」とは、そして「地域課題解決に向けて」、このような順番で進めてまいりたいと思います。

まず、足立区ですが、皆さんもうご存じだと思うのですが、『23区格差』という本。これ自体は別に問題ないのですが、上の表紙ですよね、港区904万円、足立区323万円と、嫌がらせでしかないという。これは何かというと、世帯の平均所得が23区の中でも実はこれだけ違うのだという。足立区民にとってみると決して名誉のある数字ではなくて、むしろ一番所得が低いと。さらに、本をあけてみますと、中にAクラスからDクラスまであって、なぜか足立区がDクラスに入ってい

ると。今、こういった格差本というのが、ちまたではかなり出ています。

ちなみに、今、「教育格差」とか「健康格差」という本も出ていて、残念ながら足立区は、やはり23区の中では非常に低い水準にあると。立ち読みしたのですが、足立区の場合、健康格差でいうと女性の平均寿命が23区で一番短いとか、そういうデータとしては余りいいデータがないのですね。ただ、この本なんか、犯罪多発区と言われた足立区ですけれども、最近変わりつつあるよと。ある意味では一番伸び代の大きい区であることをかなり指摘していて、読んでいて嫌な感じはしなかったですね。伸び代はあるのですね、現状はともかく。というのが足立区。

実際にいろいろ見てみると、これは例えば買い物と治安。足立区の魅力はどこかという、不動産広告なんか載っているやつですけれども、大体1位は買い物。物価が安いということですね。不満なところはどこか。治安。よく足立区というのは治安が悪いというようなことを言うわけですが、本当なのかということですから、それは後でちょっと触れます。

23区で魅力的でない街ランキングというのがありますが、断トツで足立区なのですね。これは、サンプルが少ないというのもあるし、調査としてどうなんだという気もするけれども、足立区のイメージが余りよくないというのはどうも事実のようです。特に外からのイメージです。ただ、住んでいらっしゃる方や、僕も足立区の学校に勤めていましたので、学生なんか聞くと、いや、そんな悪い感じはしないよと。これが今の足立区の現状なのかなと。

不動産広告なんかは、定住したいと思っている人は77%いると。非常に高いのですね。住み心地の魅力はあるよと。例えばですけれども、幼稚園の数は53園、これは23区中2位です。小学校の数も3位、数も多い。児童館や学童クラブは1位なのですね。非常に多い。図書館の数も3位ということで、インフラも含めて子育て環境が非常に整っているのが足立区なんですよ。

それから、公園の面積ですね、数ではなくて面積も足立区が1位。緑が多いと。

それから、犯罪ということ言うけれども、刑法犯の認知件数はどんどん右肩下がり減っているということですね。数でいうと、これは尋常じゃないぐらいの減り方。それから、1,000人当たりの刑法犯の認知件数も、全然低いというわけではなくて、ほぼ真ん中ぐらい。そんなに別に足立区の治安が悪いというわけではない。あくまでこれは都の方の持っているイメージなのですね。

さらに、そんな足立区は若い人が年々増加している。0～14歳の世代も多い。さらに、今度新たに6校目が入ってきますけれども、ちょっと前まではなかった大学が、6校目が入ってくるまでになった。つまり、今、足立区というのは23区の中でも非常に注目されている元気な区であると。

ところが一方で、これは足立区のほうも認めているのですが、1～4までのボトルネック的課題というのがあります。これは基本構想を議論するときにも、この4つが足立区が一番の課題だよなということで共有されたところです。

まず1つ目が治安。これはよくなったとはいえ、まだまだ件数自体を下げることはできるだろうということ。

2つ目は学力ですが、これも足立区は一生懸命やっています。僕も去年子ども部会にいたのです

けれども、よくやっているなど。塾と連携していろいろな取り組みをやってみたり、放課後クラブであったり、夏休みの補習であったり、学力向上のためにいろいろな努力をしているのですが、ただ、1つ課題として見ると、中学校の英語というのがなかなか伸びないというのが足立区の課題で、この辺もてこ入れが必要だという話を去年しました。

そして、健康です。健康寿命がなかなか伸びない。この背後には糖尿病の多さがあるのではないかと、野菜の消費量が少ないのではないかと、区内でもいろいろな議論をして、健康寿命を延ばすことに一生懸命頑張っている。

そして、何よりも貧困の連鎖です。これについては、子どもの中でも、貧困が問題なのではなくて、親から子、子から孫という連鎖が問題なのだということです。だから、単に貧しいというところは全国どこにでもあるのですけれども、それが連鎖していて、家庭環境の悪い子が学力が非常に低かったりとか、不健康であったりとか、場合によっては治安の悪さにつながっているというところもあるのではないかと、まずはここを断ち切ることが、足立区にとっての課題だよということ。

さらに、基本構想の中ではさまざまな課題がありました。人口が減っていくとか、税収が減るとか、経済が停滞するとか、地域コミュニティが衰退する、こういった課題をどうやって乗り越えていけばいいのかというところを議論しました。

基本構想の審議会で、僕は「くらし部会」というところにいたのですが、そのときの議論で区民の皆さんからいただいたお話で、例えば「足立区の将来像(あるべき姿)」というところで、僕がすごく気に入ったのは、「あまりお金をかけずに、まちも心も豊かに成長する」。僕はこの言葉が結構好きで、お金をどんどんかけて、道路をつくって、橋をつくって、ビルをつくってという時代ではないわけですね。お金はそんなにかけないけれども、実際そこに住んでいる人が豊かになるために、どういう知恵やアイデアが必要なのか、こういうのを考えることが大事だよという意見であったり、あとは一番下ですね、足立区の魅力を育て、それを積極的に発信していく。やはり足立区というのはどうしても外のイメージが余りよくならない。住んでいらっしゃる方はみんな、いいまちだと思っているのです。実際に、いいまちだという人の率もどんどん上がっているのです。住民は、発信を今後も積極的にやっていくことによって、もっともっと足立区はよくなっていくのではないかと。例えば若者の住みたい街ランキングなんか、例えば足立区の北千住なんかはどんどんランクインしている状況ですから、今、確実に足立区というのは、特に若い人にとっては魅力的なまちなのですね。これをもっともっとPRしていいのではないかと。

さらに、出てきた言葉として、基本理念ですけれども、「心の豊かさ」とか「一体感」。僕なんかがおもしろいなと思ったキーワードは、「お金をかけない幸せ」とか「ネガティブなイメージの払拭」とか、それからもっと自己肯定感を持つべきだと。自分のことを肯定する感覚です。それから、人や地域のぬくもりって大事だよ。その下、ここからがちょっと「協創」にかかわってるところですけれども、さまざまな主体が協力・連携するということ、これが実は大事だよ。お金はかけら

れないのだから、今までみたいに何でも行政にお願いしますとか、全部上の人がやってねという時代ではない、自分もプレーヤーとして動いてもらって、いろいろなところと結びついて課題解決に取り組んでいくという姿勢が必要だよねというような議論がなされました。

そこで出てきたのが「協創」という言葉なのです。これは基本構想の中にも書いてあるのですが、足立区の「協創」とはどのようなことかということ、区内の多様な主体がお互いを認め合って、緩やかにつながって支え合うことで力を発揮する。簡単に言うと、いろいろなことをやっている方が、今までは点で動いていたわけですね。企業の方は企業の方、NPOはNPO、町会・自治会は町会・自治会、それから、自分の所属している団体では頑張っていていたけれども、それがなかなか線や面になっていないのではないかと。頑張ろうとしてみんな一生懸命やってきた。とにかく、つなげるまでは、今まで「協働」の取り組みということで頑張ってきたのだけれども、それがなかなか面にはならないよねと。これからは人口減少が進み、少子高齢化が進んでいく中で、今までのように点とかだけで動いていると、なかなかこれからの地域の課題解決は難しいのではないかと。ところが、「協創」という考え方の始まりです。

ですので、今までは「協働」ということで、例えば役所と企業とか、役所とNPOという個別なつながりがあったのですが、それをさらにネットワークであり、面であり、そういうものに広げていくというのが「協創」ということになります。

そして、「協働」から「協創」へということ。基本構想・基本計画とありますけれども、これまでのものについては「協働」という言葉がよく使われていました。前の基本計画の中では、実際に「協働」は浸透しつつあるということを言っているのです。しかしながら、多様な担い手がつながり、主体的な活動が活発に展開される状況までは至っていない、まだ道半ばなのだ。「協働」と頑張っていてはいるけれども、まだ道半ばですよ。

さらに、行政が主導的な役割を担うことはもう限界なのではないかと。今まで、例えば「協働」の考え方は、行政がある程度活動する舞台を用意してあげるわけですね。この中に皆さん入ってくださいと。それでつながっていく。あくまで行政が中心にまちづくりや地域課題の解決が進んでいた。それでいいのかということですね。それで、今までの地域課題の解決というのがなかなかうまくいかなかった側面もある。ここについては、ちょっと考え方を変えてみる必要があるのではないかと。ということです。

ですので、今までの「協働」を完全にやめてしまって、「協創」に新たに全面的に変えてしまうということではなくて、「協働」である程度いけているものについては「協働」を進めていく。ただ、これだけでは課題解決が難しいよねというものについては、「協創」という考え方を持って取り組んでいく必要があるのではないかと。プラスアルファの発想です。

ちょっと先に行くと、図を見るとわかりやすい。こんな感じなのですね。例えばですが、協働、というのはこの図です。真ん中に区役所がありますね、足立区ですね。そして、区民がいる、大学がある、例えば町会・自治会がある、NGOや企業がある。あくまで真ん中に区があって、

それぞれが個別につながっていた。例えば区役所でいうところのNPOとつながっているのは市民活動の部局ですから、そこでつながっていますよと。大学だったら大学連携の部署があるから、そこでつながっているよとか、そういうあくまでも個別的なつながりですよ。そうすると、これだと線にはなるけれども、面にはならないのです。あくまで真ん中に区役所がある。だから、区役所を通さないと何もできないのです。

イメージとしては、「協創」というのはこんな感じなのです。一番下のところに「多様性」とか「つながり」というのがあって、ここがもっとネットワーク状に、クモの巣状というか網目状になっていて、「協創力」という、みんなが主体として動くことによって、それが上に上がって進化や活力につながっていくというのが、足立区の描く「協創」モデルなのです。

ではどうするかというと、こういう感じですね。簡単に言うと、大学、NPO・企業、区民、自治会、区役所が、プラットフォーム、同じところに乗っかる。今までのように区役所から線が出ているのではなくて、それぞれがつながっていくような場をつくって、それぞれが主体として動いていますので、それによるつながりができる。これはどういうメリットがあるかということ、縦割りという、行政がなかなか脱することのできない課題が今まではあったわけです。今回の区民評価でも、皆さんがヒアリングするところというのは、その担当部署の方がヒアリングする。どうしても役所というのは、縦割りがあるということは、役所の性質上しようがないのです。けれども、課題というのは縦割りであるわけではないわけです。となった場合に、それを横串で刺すような仕組みづくりが必要になってくる。

特に地域課題、例えば貧困であったり、貧困の連鎖であったりというものは、例えば、では貧困だから、子どもだから子ども部局だけが取り組んでいけばいいかということというわけではなくて、いろいろなところが横串に刺さる。しかも、今までであれば、それを支えるNPOと社会福祉系の事務所であったり、あるいは特定の関係者だけでそれを支援していたのが、もっと新しい担い手がいるのではないかと。例えば大学であったり企業であったりNPO、今まで区の施策にあまりかかわってこなかった人たちにもここに入っていて、横串で刺すような仕組みをつくっていきこうというのがプラットフォームづくりということです。

ですので、ちょっと前に戻ると、「協創」が機能するための前提条件としては、まず自立するための力をそれぞれが持つということはもちろんですけれども、何よりも多様性を受け入れられる、いろいろな人とやっいていこうよという機運がないと、それは難しい。簡単に言えば、排除の論理ではなくて、お互いを認め合うという形が必要になってくるだろう。

緩やかなつながりをそこでつくるので、では一体、行政って何をやるのということ、まずは緩やかなつながりのコーディネートをしてもらう、あるいはサポートをしてもらうのが行政の役割です。何でもかんでも我々が行政にお願いして、行政がやってくれました、ありがとうございましたではなくて、行政はそれをコーディネートする役割が出てくるよと。それから、個人的にはですけれども、幾つかのモデル事業をつくって、それを「協創」のプログラムの中でこなしていくということも

必要になってくるかもしれない。

例えば、ちょっと先に進むと、足立区でいうとこれですね、「協創を推進するための区の役割」とあるのですけれども、まず、「協創」の担い手の発掘や支援・育成ですね。こういうことをやっていただかなければいけない。「協創」を誰がやるのか、皆さんがやるのですけれども、今までかかわっていなかった方々。僕は特に企業の方とか、町会・自治会は結構頑張っているんですけども、NPOでもまだまだ入っていない方もいらっしゃるのですね。それから、大学とか学校関係、若い人たちにも入ってもらいたい。

それから、場づくり。さっきプラットフォームと言いましたけれども、これをまずつくっていかねばいけないなど。それから、指針もつくっていかねばいけないですね。ある程度、「協創」のルールづくりみたいなものもやっていかねばいけない。もう1つは、さっき言ったように、モデル事業ですね。

例えば僕なんかが一番いいと思うのは、次にあるような子どもの貧困対策ですね。これなんかは比較的「協創」の考え方を使ってやりやすい。何でかという、1部局だけではなかなか解決し得ないような地域的な課題であるからですね。例えば、細かいですけれども、いろいろ見ていくと、まとめると、このあたりにちょっと「協創」の考え方が入っているのです。何て書いてあるかという、「全庁的な取り組みをします」と。これは足立区が出した概要版なのですから。それから、学校＝プラットフォームにおいて、いろいろな人が参加できるような仕掛けをつくり出すということの中で言っている。それから、民間・NPOと連携しますよということの中で言っている。これができたときはまだ「協創」という考え方が強く出ていませんでしたけれども、「協創」の素地みたいなものはこの中にあるわけですね。

さらに、これは裏側のほうですけれども、この中にも、子どもの貧困対策に貢献したい企業と現場で活動しているNPOとのマッチングとか連携強化が大事だということ、もう区はこの中で言っているのですね。

ということは、これができた時期に全面的に「協創」ということをうたっていませんでしたけれども、足立区のある程度考えていること、「協創」という考え方がこの中にもう位置づけられているということです。いろいろな主体が集まって、横断的に結びつくことによって、課題解決に結びつけていくという発想ですね。

実は、「協創」ってなかなか耳慣れない言葉ですけれども、自治体でも結構使っているところはあります。例えば、僕は足立区の大学に来る前は三重大学という大学にいたのですが、「みえ県民力ビジョン」という、僕もこの作成にかかわったのですけれども、三重県の新しい知事になったときに、県民力のビジョンをつくるというときに、「協創」という言葉が出てきました。

三重県ではこれをどういう使い方をしているかという、一緒です。「協働」だけでは、ただつながるだけでしょうと。三重県の考え方は、「協創」というのは、新しいものをつくり出すという、つくるという視点があるのだと。つまり、単に結びつくだけではなくて、その成果が大事なんだよね

というのが三重県の発想なのです。だから、逆に言えば、数字とか結果というものに非常にこだわります。いいか悪いかは別ですけれども。

まず として、アクティブシチズンという言葉を使う。まず、行動する市民でなければいけないという発想ですね。まず、一人一人が自覚を持って活動してもらわなければいけないよと。そういう人たちの県民力を結集する。これを「協創」といいます。そして最終的には、幸福実感日本一の県にするのだと。

これが鈴木英敬知事です。奥さんは武田美保という、今、三重大の教授をやっている方で、この2人で三重県を今牽引している。

2人とも非常に気さくな方で、県に元気をもたらす知事ではあるのですが、ただ、僕も幾つかひっかかるところはあって、例えばアクティブシチズンという言葉、自立して行動する県民とありますけれども、そんなに県民ってやる気があるのか、そこまで自立できるのか、そこまで高いハードルを課していいのという。置いていかれる人が出てくるんじゃないの、そういう人はどうするのという疑問もある。それから、県民力を結集するって、一体どうするのと。まとめるということをややすく言うけれども、逆に言えば、散らばっていてもいいんじゃないという考え方もあるし、さらに、新しいものをつくり出す成果主義というのはどうなの、結果が全て、ではそのプロセスはどうなのとか、突っ込みどころは満載なのです。ただ、三重県は一応これで頑張ってきた。ただ、やはり同じような突っ込みが県民の中からもなされてきて、今ちょっとトーンダウンしているというのが実態です。

ビジネスの世界では、実は「協創」という言葉はよく使うのです。例えば、足立区の1月のシンポジウムにも来ていた笹谷さんは、著書の中で、協創力というのは、「協」、「創」、「力」という3つの視点があって、「協働」のプラットフォームづくりをしていくことが重要だと。これは足立区と一緒にですね。それから、「創」。価値を共有する。みんなで共有価値をつくり出していく。最後は発信をしていく「力」なのだ。そのためには、産・官・学・金・労・言、いろいろな主体がプラットフォームに集まって連携することが大事なのですよと。さらに、それを情報発信、がんがん発信していくことが大事ですよというようなことをおっしゃいました。アドバイスいただいた。

その下、また民間のいろいろな考え方で、新たなものをつくり出すという視点ですね。みんなが集まって新たなものをつくり出すという視点も民間の中には「協創」という言葉である。

では、足立区は「協創」をどう位置づけるかという、まずは僕はこの3つだと思っています。協創プラットフォームをつくる、それから、協創のガイドラインをつくってルールづくりをしよう、さらに、多分幾つかの協創に適したモデル事業があるはずなので、リーディング事業を進めていく必要があるだろう。足立区としては当面、多少時間がかかるかもしれませんが、この3つをやっていく。

そう考えてみると、まず幾つか大変なことがあります。僕が一番大変だと思うのは、職員さんですね。今までだったら行政がちゃちゃちゃっと1人でできたところを、結構これは面倒くさい。

僕も昔、協働の指針づくりとか、そういうことをほかの自治体でやったことがあるのですが、まず職員さんが大変ですね。何でかという、今までだったら勝手に決めてできたことが、一緒にやらなければならないわけですね。コーディネートして、課題を横串で刺すようなことって、やってみると意外に面倒くさいのですね。あるところでは夜な夜な会議をしていたりとか、市民の皆さんの都合、区民の皆さんの都合が夜の場合だと夜の会議がふえたりとか、休みの日もいろいろなイベントでということはよくありましたので、結構大変だなというのが正直なところです。ですので、職員の意識改革。ただ、4月から協創推進部局ができたそうですから、そういう意味では、区も全庁的に「協創」というのを進めていくということです。

僕も、実は各地で「協創」に近いような取り組みをしていました。例えば三重大学にいるときは、自治体と大学が連携して集落支援のようなこともやっていました。学生たちが一緒になって地域の課題解決に取り組む。今よく大学なんかでやるプログラムの1つですけれども。例えば、学生の若さであったりバイタリティをうまく地域づくりに結びつけていく。そうするとメディアも取り上げてくれたり、それから、こういった集落での活動というのが、学生自身のキャリア教育にもつながっていくし、地域のやる気もここで培われていくわけですね。最終的には行政の一番得意な事業化。これを単なる一過性のイベントで終わらせてしまうのではなくて、国の事業とか県の事業にうまく結びつける。

例えば、これは漁師町だったのですが、単に魚を売るだけでは全然漁師の収入にならないので、それをちょっと加工して、国道沿いでお弁当として販売するという、「笑顔食堂」という事業に結びつけたり、それから、漁師の担い手がないところで後継ぎを育成しなきゃいけない、でもそういったノウハウがないとなると、塾をつくっちゃえばいいということで、これは早田という地域ですが、「早田漁師塾」というのをつくって、そこの漁協の人たちがみんな先生になって、大阪や名古屋から若者たちが来て、塾として後継者を育てるといようなことをやりました。

上のほうにある施設は、これも学生の提案なのですが、なかなかみんなが集えるコミュニティ施設がないということで、いろいろな調査をしながら国の補助で建ったものです。もともとは、町を歩いていても、高齢者はみんな外を歩いていないよねというところからスタートして、何でと聞いたら、みんな家でテレビを見ていると。家でテレビを見ているといたら、老化も進むし、いいことないよねと。じゃあ外で話そうよといたら、話す場所がないと。場所がないのだったら、つくればいいじゃないかということで、いろいろ画策してやってみたのがこういう感じです。これもやってやれなくはないのですね、最初から諦めちゃうんじゃなくて。

それから、これは例えば足立区でやった産学公金連携プロジェクト。僕が未来大にいるときに、足立区と足立成和信金、スズラン製菓の4者連携でやったのです。スズラン製菓という町工場、小さなお菓子工場だったのですが、学生のアイデアとか発想で、下にある、例えば、「大人のウエハース」という甘くないウエハースであったりとか、スープにつけて食べることによって朝食がわりになるよというバームクーヘンだったりとか、こういうものも開発して、いろいろ展示会とかでやっ

たら、2日間で22万8,000円売り上げたという。これはあだちメッセという、そんなに人が来るイベントではないですけれども、これだけ売り上げるという。

それから、高島屋で、東京未来大学で売ったら、38万の売り上げがあった。これは結構足立区の人買いに来てくれました。僕も店に立っていたのですけれども、足立区から来ましたとか、広報で見ましたとか、足立区の方が新宿まで買いに来てくれるという。足立区がこんなことをやっているなんて驚きですという話もいただきました。つまり、区民のやる気につながる。新聞報道やテレビ、「ワールドビジネスサテライト」で放映されたりとか、いろいろなことをやって、区のPRにもなった。

僕は今、埼玉大学にいますけれども、JR東日本と連携して、言い方はあれですけれども、何もなしよばい駅なのですけれども、与野本町という埼京線の駅なのですが、この駅前の活性化ということは今学生と一緒にやっていて、これもJR、さいたま市と連携する形でやっています。学生のアイデアをまちづくりに生かしていこうみたいな。

こういったのも、ある意味では多様な主体が集まって、横串で刺すような形で地域課題の解決に向けて取り組んでいるという点では、発想自体は全く一緒なのです。ただ、今までは、これをコーディネートするというのがなかなかできなかったということもそうですし、多様な主体がといますが、なかなか点を線や面にするというのは難しいのです。1人で勝手にやっていたほうが好きだという人も結構いますし。そうなったときに、では、どういう場づくりが必要なのかとか、どういうルールが必要なのかとか、どういうモデルが必要なのかということも足立区には今後考えてもらいたいですし、逆に言えば、ここにいる皆さんはひょっとするとそういった主体、プレーヤーになる可能性が極めて高い人たちですので、皆さん自身が足立区の課題解決にどういう形でかかわれるのかをぜひ考えていただければと思います。

それで、こんな学生も発表するということです。

最後に、これも足立区でやっているおもしろいケースなのです。去年ぐらいからずっと議論していたのですけれども、まず1つは、大学コンソーシアムというのはおもしろいよねという話です。おととしの区民評価委員会のときに、区民の皆さんから、もっと大学連携をいろいろやったほうがいいよという課題が出たのです。そうしたら、区の回答として、区民評価報告書の中で、大学コンソーシアムというのを考えてみてもいい、区内企業が多様な形で大学と連携できる仕組みをつくっていきましょう。つまり、区民評価というのは、皆さんがある程度の提案であったり提言をすれば、区の方は真摯に回答してくれます。実際それが形になっているというケースもありますので、これから評価に入りますけれども、提言のほうも、僕はぜひ積極的にしていただきたいと思っています。最後ですけれども。

それから、これは実際に埼玉でやっているコンソーシアムですが、コンソーシアムというのはおもしろいです。大学間が連携して、いろいろな方々と一緒になっているいろいろなことをしていく。どの地域でも結構あるのですが、この中でやっていることで、「政策提言フォーラムinさいたま」とい

うのがあるのですが、埼玉の学生たちが自治体の政策提言をする。これは交流人口をふやすという市の取り組みなのですが、これについてコンテスト形式で競わせて、どの大学が優勝したとかやる。それが形になるかどうかは別として、少なくとも大学と地域とが連携するきっかけにはなるというような取り組みです。

もう1つ、今、足立区でCSRということを、これも去年から取り組んでいるのですが、自治体のCSR認証ですね。例えば、僕はぜひこの取り組みに企業の方に入ってきてもらいたいと思っています、この「協創」の枠組みの中に。そのときに、企業として見ると、ただでさえ今仕事が忙しい、人が足りないで頑張っているのに、こんなボランティアみたいなことできないよという企業は結構あると思うのです。企業はやはり利益で動いている面もある。だから、これに入るメリットやインセンティブというのをつくってあげなければいけない。つまり、プラットフォームに乗るということは、あなたの企業にとってもすごくメリットがあるのですよという仕掛けをつくらなければ、企業はプラットフォームに入りません。だから、そのための仕掛けづくりをぜひやってもらいたいと思うのです。NPOや企業が入ってくる仕組みです。

例えば、さいたまや横浜は、こういった認証のマークを企業に与えるのです。社会的に貢献度の高い企業はこのマークをあげますと。認証してあげることによって、これを自由に企業活動に使ってくださいというようなことをやってあげると、企業も、こういうマークをくれるんだったら、区が認証してくれるんだったら、自分たちもちょっと動こうというようなことにつながってくるかもしれません。

こういった認証のときに、例えば大学などが入れば産学官の連携にもなる。実際に横浜市立大学がこの認証をやっているわけです。そう考えてみると、いろいろな連携ができる。ぜひ皆さんも、「協働」から一步踏み込んだ「協創」という考え方でこれからの区政を見ていただいて、また、区民評価の点でもぜひ、このやり方は「協創」とは違いますよねというぐらいの突っ込みを今後入れていただいてもいいかなと思っています。

僕の発表は以上です。ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

田中会長 石阪先生、どうもありがとうございました。とてもわかりやすいご説明をいただきまして、私自身も基本構想をつくる側に立っていたのですけれども、今、何か霧が晴れたような思いがしております。あと、今お話に出てきました、いろいろな連携というのを超えて、協働を超えて協創していくというのは、点ではなくて、点をつなぐ線でもなくて面だということは、すごくずとんと腑に落ちたような感じがしましたので、本当にどうもありがとうございました。

それでは、質問やご意見、どうぞご自由に石阪先生にお聞きください。

金子委員 この「協創」コンセプトは、10年、20年という長いスパンでのことだとおっしゃいました。完成形というイメージはあるのでしょうか。これで「協創」コンセプトは完成したという、そのようなイメージはあるのでしょうか。

石阪副会長 1つは、「協創」というのは、あくまで目的ではなくて手段だと僕は思っていますの

で、例えば課題がいろいろありますよね、その課題が解決したときが一応終わりということになると思うのです。そのためのプロセスとして、今までのやり方、つまり点と点をただ結んでいくというやり方だとなかなか難しいだろう。むしろそのプロセスですよ。みんなでやったほうが、コストの面でも人の面でも、あるいは効率の面でも、面でやったほうが社会課題の解決には向いているのではないかとこのところでは、あくまで課題が克服されたときということになります。

金子委員 「協働」コンセプトは何年くらいやっていたのですか。

事務局（政策経営課長） 「協働」という考え方を取り入れたのが、12年前に基本構想をつくったときからです。なので、平成17年当時に「協働」という言葉ができて、そのときにも実は地域の企業ですとか大学、NPOが主体的になって活動するということを想定して「協働」というのをつくってきたのですけれども、今12年たって、新しい基本構想をつくるときに、確かに「協働」は大分広がってきたけれども、当初考えていたような主体的な活動が足立区の中で本当に広がって解決が進んだかということ、なかなか行政が引っ張っていた感があったりとか、協働のパートナーが固定化されたりというような問題も出てきたので、新しい考え方として「協創」というものをつくってまいりました。なので、「協働」が出たのは12年前。これからも「協働」は続きますし、「協創」を今後はそういう考え方、今の「協働」の取り組みをさらに一歩進めたような形の「協創」を目指して取り組んでいきたいと考えています。

金子委員 時間的な目標とか、何年というものはありますか。

事務局（政策経営課長） 一応、何年という期限はないのですけれども、今回の基本構想は向こう30年先を見据えて基本構想を立てましたので、「協創」という取り組みは、これまで「協働」でやってきて、12年かけてもなかなかでき上がらなかったものをこれから進めていこうという考え方なので、10年、20年、長いスパンで取り組みを継続していきたいと考えています。

石阪副会長 補足をすると、恐らくですけども、プラットフォームづくりであったりとか、指針・ガイドラインづくりとか、モデル事業の選定あたりは、僕はこの1～2年でできていると思っています。まずはスタート地点ですけども。では、ここからどうなるかということ、その社会課題の重さとか、広がりぐあいによって変わってくると思うのですが、仕組みづくりは恐らく1年から2年くらいでやらないとまずいですね。

事務局（政策経営課長） まず第一歩は今年度中にスタートさせたいと考えております。

金子委員 らせん形で上に上がっていくというのは非常に難しいんじゃないかという印象を受けました。

矢野委員 私たちは区民委員としていろいろな事柄を評価するわけですけども、「協創」の理念がある程度反映されているか、されていないかということも、その評価に含まれてくるのでしょうか。例えば、十分「協創」の理念が反映されている部門に関しては評価が上がるのか、そういうことにも関係してくるのでしょうか。

石阪副会長 恐らく今年度の事業については、多分、全庁的に「協創」の考え方はいつているはずなのですけれども、昨年度のものについては、でき上がって間もないときで、僕もいろいろなところで仕事をさせてもらっていますけれども、まだ「協創」という考え方を区の庁内の方も余り、何だ何だというような感じで、それで去年ずっと研修をやってきたのですよね。ですので、今回のものはちょっと厳しいんじゃないですかね。

事務局(政策経営課長) 29年度の区民評価は、28年度事業の評価がベースになってしまうので、基本は「協働」の考え方がどれだけ反映されているかということがあると思います。ただ、今後、いろいろご意見を頂戴する際には、ここは「協創」の考え方をもっと積極的に取り入れたらというようなご提言をいただくとありがたいなと思います。

矢野委員 では、特に来年度以降ということでもよろしいでしょうか。

事務局(政策経営課長) 30年度の評価には、ガイドラインもでき上がっているはずでございますので、「協創」の評価ということもぜひいただければと思っております。

田中会長 ほかにいかがでしょうか。

石阪副会長 瀬田さん、どうですか。シンポジウムに参加いただきましたけれども、ちょっと振りたくってきたのですけれども。

瀬田委員 非常にすばらしい概念だなと私は思っています。やはり一人一人の主体性がこれから大事になると思いますので、行政に何を求めるかではなくて、まず動いて、我々に足りないものを、行政の方々も巻き込んで支援していただくという考え方が大事だと思うのですが、やはりちょっとわかりにくい概念ではあるので、先生が幾つか出していただきましたけれども、事例ですね、実際、プラットフォームがこうあって、ここから新たな「協創」価値が生まれたよという事例をたくさん出していただくことで、皆さんが、あっ、そういうことなんだなと、こんなだったら自分もやれそうかなというふうなきっかけになるのかなと考えていますので、ぜひどんどん事例を出していただきたいなと思います。

それから、区民評価においては、多分28年度はそういう概念はなかったと思いますけれども、評価するに当たって、なかなか課題が解決できていないなというところを、「協創」という視点から捉えるとどういう課題解決の方法が考えられるのかなと、そんな視点で一緒に評価をさせていただいたら今考えています。ありがとうございます。

遠藤委員 質問ではないのですけれども、今の議論で、瀬田さんがおっしゃったとおりだと思いますけれども、特にまちづくり分野、分科会、昔からこの問題があって、今やっと「協創」という言葉が出てきたという状況だと思います。全く公共任せで、それに文句だけ言っているのが昔のまちづくりだった。それが今、徐々に変わりつつある。これは区民の皆さんにとっては非常に厳しい話になるのですけれども、甘い言葉だけでいいことができるわけがないんですから。

ということで、30年度以降のプロジェクトにというよりは、気がつくことがあったら今年の評価の中にも、こうしたらいいんじゃないのという議論はどんどんもうやるべきだろうなと思っています。

す。難しいですけども、というつもりであります。

村田委員 私は初めて去年の夏だったか秋だったかに、足立区で今度、「協創」という言葉を使って何か考えているよという話があったときに、じゃあ一体「協創」って何なのよといったときに、仲間内では、地域の課題は地域が自主的に解決するんだってよという話があって、じゃあ役所は一体何するのよというのが当時ありました。

今いろいろご説明を聞いていると、「地域の課題」という言葉はまだ残っているようだけれども、「地域が自主的に解決する」という言葉は消えたので、あれっと思ったんだけれども。ただ、プラットフォームに乗るといことなので、じゃあ、土俵に乗った力士を、はっけよい、はっけよいとやるのは一体誰なのかなという気がしますね。そこで、はっけよい、はっけよいと、土俵際でうっちゃったのか、うっちゃらなかつたのかと決めるのは、一体誰が決めるのかなと。まずプラットフォームに乗せるのは結構だけれども、乗ったのはいいけれども、誰がリードするのかなというのはちょっと見えていないような気もするし、ちょっとそこは話がなかったような気がします。お願いします。

石阪副会長 プラットフォームづくりって結構どこでもやっている、言い方は悪いですけども、足立区だけではなくて、実はどの自治体もプラットフォームをつくりましょうということまでは結構言うのですが、いざやってみるとうまくプラットフォームが機能しないということは結構あるのですよね。場をつくったけれども、何か審議会や協議会がただたくさん生まれたみたいだね。別に審議会や協議会を批判しているわけではないのですけれども、ああやって充て職みたいな方がいっぱい出てこられて、一言意見を言って、はい終わりですと。こういうプラットフォームにしてしまっっては恐らくいけないと思うのです。

プラットフォームをうまく機能させるためには、やはりそこでうまく主体同士が動いていくような仕組みをつくれる人、つくれるところと連携してやらないといけない。まずは人材育成ということも同時に重要になってくる。それができる人がいないといけない。コーディネーターづくりというのは大事だと思います。

笹谷さんという、来ていただいた方も、シンポジウムするときも、コーディネーターが物すごく大事だと言っていました。プレーヤーも大事ですけども、それをどうやってうまくまとめたりコーディネートするのかという、その人材が育たない限りは、少なくとも、幾らプラットフォームをつくっても、ただ期限が来たら、はいおしまいみたいな形になってしまうということをおっしゃっていたので。ですから、その人材育成の部分やコーディネーターの育成ということもすごく大事ですね。プレーヤーだけをただ上に乗せただけでは、けんかして、はっけよいのこつたで、一瞬で終わっちゃうのですね。だから、そのようなところもこれから課題なので、恐らくその辺も区としては詰めていきますね。

事務局（政策経営課長） 本当におっしゃられたとおりで、そういった会議体、プラットフォームの運営についても、これまで区が事務局でやってきたやり方ですと、多分、「協働」からなかなか「協

創」という形には見えてこないもので、新しいそういった運営の仕方を考えていく。コーディネーターを養成するということも、いろいろ「協創」に取り組んでいるNPOとか、民間でやっているところを、いろいろ講師にお呼びしたりしながら、人の育成ということも、もちろん職員の意識改革もすごく重要なので、そういった機会をつくりながら「協創」を広げていきたいと思っています。

やはり人がまずあって「協創」の取り組みだったり事業化というものが進むと思いますので、まずはこの1年間は、いろいろ人材がつながるような取り組みであったり、人の育成であったり、そういったものに力を入れていきたいなと考えてございます。

山崎委員 すみません、概念が難し過ぎて私には余りよく理解できない部分も多いのですが、もっと具体的に説明していただきたいのですけれども、例えば、私の年代でいうと、やはり保育園問題というのがすごく問題になっていますが、その保育園問題を、じゃあ「協創」でどうやって解決するのかと今考えてみたのですけれども、全然わからないんですね。例えばどういうことなんですか。

石阪副会長 恐らくですけれども、保育園問題で、これまでのやり方というのはどうかということ、予算をたくさんつけて保育所をふやすとか、いろいろなサービスを行政のほう提供するということですね。これが今までの保育のあり方だったのですけれども、「協創」というのは、それを削るのではなくて、お金とか人の動かし方を変える。予算を切るというよりは、むしろ民間にできることもあるんじゃないのとか、あるいは民と公が協働してできる何か仕掛け。例えば、もっと言えば、民間の参入なんていうことも、ひょっとするとあるかもしれない。NPOや民間が、うちはこのことをやっているのだけれども、このサービスって保育にも援用できるよね、使えるよねということ、企業にもウエルカムで入ってもらうのですね。まずはそれを使えるかどうかをプラットフォームの場で議論してもらおう。そうすると、今まで行政がやっていた保育行政、全部行政がやっていたことを、じゃあちょっと民間のほうサービスがおもしろいから、こっちにもお願いしてみようかということで、新たな事業につながるとか。

具体的にはちょっとわからないですけれども、何かいろいろな新しい力や血が入ってくるような仕掛けづくりをしないと、結局、予算がどんどん膨らんでいって、サービスがただただ垂れ流しということになってしまうと……。本来、保育というのはみんなで考えて、みんなでそれを支え合っていくような仕掛けも必要だと思うのです。

どうしても行政でなければできないものは行政にお願いするのはしょうがないと思うのですけれども、そうじゃない、例えばソフトの面で、こういうところは民もできるんじゃないかとか、あるいは、僕はこういうノウハウを持っているからぜひ使いたいんだという人の協力を仰ぐという。どうですかね、具体的にはなかなか難しいですけれども。

事務局(政策経営部長) 政策経営部長ですけれども、保育園のお話は、今、石阪先生からありましたけれども、これからいろいろと課題が多いのかなと思います。では具体的にこういったものが考えられるか、例を2つばかり言います。

まず1つは、実は今、公園の管理は地元の方をお願いしてやってもらっているのです。少しの謝

礼をお支払いして、町会とか自治会とか、そういう方に自主的に清掃してもらったり、見守りをしてもらっています。その維持管理だけではなくて、さらにその公園を、どういう活用をしていくのか。例えば、子どもたちにこんな遊びをやらしてもらいましょうとか、ゲートボールも自分たちでやる時間を決めますよとか、自分たちで、自分の地域の庭として、維持管理だけではなくて、活用までやらしてもらおう。それを自分たちで楽しんでやらしてもらえよう、そういうふう発展していくことが、一つの「協創」の進む方向かなというのが1つあります。

もう1つ。刑法犯認知件数が非常に高かったので、今、治安対策を進めていますけれども、その中で、今、防犯まちづくりの協議会というのを地元につくってもらっているのです。それは、自分たちで自主的にパトロールをして、子どもたちの見守りをしてもらうようなことで進めています。それは区のほうから、どうですか、この地域で防犯活動をやりませんかというお声がけをするのです。最初はそうです。ところが、そのうちだんだん、その地域の人たちが自分たちで、ここはもっとよくしたほうがいいとか、お花をつくることによって、それが見守りにもつながるので、ここは花を植えましょうとか、そういう活動にだんだん広がってきているのです。それは区が呼びかけたことがきっかけですけども、さらに地域の子どもたちとかを守るために、そういう自主的な活動がどんどん広がっている。

そういうことが、「協働」から「協創」に発展していくような事例になるのではないかなということで、今そういったことが考えられます。今後はさらにいろいろなところで、やらされるというのではなくて、自分たちで自主的にやって、楽しみながらとか、生きがいを持ちながらとか、地域のためにとか、そういうことを考えて、自主的な活動がどんどん広がっていくというのが、一つの「協創」の考え方かなと思っています。

瀬田委員 今の保育所のお話ですが、例えば、私は中小企業を営んでいますけれども、私の知り合いの製本会社があるのですが、ここはやはり人手が足りないのですね。片や地域にはお母さん方がたくさんいらっしゃる。ボトルネックは、やはり子育てのために勤められないんだよということで、製本会社の横に保育所をつくっちゃったのですね。そうすることによって、会社としても潤うし、お母さん方も助かる。

今、私の会社も、実は女性を、お母さん方をたくさん採用しようということで、今年2人採用させていただいているのですけれども、子育てをどう支援していくかというのが会社のテーマなのです。地域の同じような、私と一緒に、人手が足りないと思っている社長とかが集まって、じゃあ保育所を建てようよ。それには、我々だけではできないので、例えば大学のお力を借りたり、金融機関のお力を借りたりして、どのようにやったらビジネスモデルがつくれるのかということは、できる可能性があると思うのです。そこは結構悶々としている。できる可能性があるんじゃないかなというふうに。例えばですけども。

あと、もうちょっと前の質問に戻りますけれども、コーディネーターが非常に大事で、私は「協創」のプラットフォームを幾つか実はやっています。もう1つ、前からある組織、例えば商工会議所

とか法人会というところにも入っています。もともと、村社会というのですか、違うものを排除しようというのが、結構、私の感じる旧来型の組織です。こういうふうになっているんだから、君、言うことを聞きなさいよと、そのために、わかりましたということで力のかすというのが今までの組織で、「協創」のプラットフォームというのは、逆に、違いがあるからいいんだ、考え方が違うからいいんだよねということで、お互いの違いの中から新しい視点とか価値を生み出していく。これができる、最初自分たちが思いもつかなかったアイデアとか事業とか企画ができてくるという体験をしています。そういう意味でも、多様性とか違いを認めるリーダーシップというのですか、コーディネーターが非常に重要で、そういう方々は、実は民間にたくさんいらっしゃるのですね。足立区にも周りにも結構います。そういう方をどんどん支援していただきたいなと思っていますし、そのような事例を出していくことで、そういうことだったのねと、自分たちの周りにもいるよねということに多くの方が気づいていただけたらなと思っております。

田中会長 どうもありがとうございました。

議論はまだまだ尽きないところですけども、時間も来ておりますので、次の次第に移らせていただければと思います。石阪先生、どうもありがとうございました。

2 会議の傍聴等について（資料2）

田中会長 では、次第の2に移りたいと思います。「会議の傍聴等について」でございますが、具体的には分科会の公開について皆様にお諮りしたいと思っております。

資料2の足立区区民評価委員会条例施行規則第4条により、本全体会及び分科会は公開が原則というふうになっております。ただし、分科会につきましては、所管とのヒアリングは公開でございますけれども、それ以外のところにおきましては、皆さんの自由な議論に支障が生じるおそれがあるという判断から、昨年度までは非公開となっております。

今年度の分科会におきましても、ヒアリング以外のところは非公開としたいと思っておりますが、いかがでございましょうか。 よろしいですか。はい。

それでは、ヒアリング以外は非公開というふうにして進めてまいりたいと思います。どうもありがとうございました。

3 今後の開催日程について（資料3）

田中会長 続きまして、次第の3、「今後の開催日程について」でございます。事務局のほうからご説明をよろしくお願いいたします。

事務局（経営管理担当係長） では、事務局のほうから説明をさせていただきます。資料3「今後の開催日程について」をごらんください。

こちらは、第1回のときに年間スケジュールをご説明した際に未定としていた部分についてまとめたものでございます。各委員の皆様には、事前に確認表の提出、また、スケジュールの調整に関してご協力いただいたことに対して改めてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

それでは、上から説明させていただきます。

公募委員研修については5月31日。こちらは、昨年度から引き続き委員を務めてくださっている方も合わせて公募委員全員とさせていただいております。ヒアリングや評価の具体的な流れをここで説明させていただきます。

新任委員の皆様に関しては、4月6日の際に事前研修は実施させていただいておりますけれども、引き続きやっけていただいている委員の方々から、各分科会ごとの実際の評価の様子などを共有できるいい機会ではないかと考えておりますので、出席をお願いいたします。

第3回、第4回の全体会につきましては、8月22日と9月1日を予定しております。こちらで、分科会でそれぞれ集約された結果をまとめて検討して、最終的に第4回で承認という形に持っていきたいと考えておりますので、ご協力をお願いいたします。

9月8日に関しては、田中会長のみになりますけれども、区長に対して区民評価結果の答申、報告をしていく予定でございます。

10月24日は意見交換会ということで、区長を含む区の幹部、経営会議のメンバーと区民評価委員会の方々との意見交換会を予定しております。

行政評価報告会については、追加で日程調査票を送付させていただいておりますが、現在、12月以降の実施について調整させていただいております。これは近々に決定したいと思いますので、決まり次第、ご連絡させていただきたいと思っております。こちらについては、学識委員の先生に、各分科会の結果として、職員を含めた方々に報告いただく場となっております。公募委員の皆様にも報告を聞いていただくと幸いです。

正式な開催通知については後日郵送させていただきますとともに、全体会答申に向けた分科会のスケジュール等については、この後、分科会ごとで調整させていただきたいと思っておりますので、よろしくをお願いいたします。

事務局からの説明は以上です。

田中会長 どうもありがとうございました。

今の説明について何かご意見、ご質問等があれば、よろしくをお願いいたします。 よろしいですか。

特にないということであれば、次に移りたいと思っております。どうもありがとうございました。

4 分科会の日程および進行の調整について

田中会長 続きまして、今お話にもありましたように、「分科会の日程および進行の調整について」

ということで、次第の4番でございます。

第1回足立区区民評価委員会におきまして、資料4のとおり決まりました分科会に分かれていただきまして、今年度の各分科会のスケジュールや運営についての調整を今から行っていただきます。

それでは、事務局がご案内いたしますので、それに従って席の移動をよろしくお願いいたします。

事務局（経営管理担当係長） 重点プロジェクトに関する3分科会については、この8階の特別会議室内で行います。一般事務事業見直し分科会については、9階の財政課のほうの査定室で行いたいと思いますので、それぞれ分けて実施させていただきたいと思います。まちと行財政分科会に関しては遠藤先生のあたりのところに集まっていたいただきまして、くらしと行財政分科会は石阪先生のあたり、ひと分科会については、係長の富田が「ひと」の委員の皆様のところに行きますので、そこで打ち合わせをしていただきたいと思います。大体30分程度で、3時半にこちらにご集合いただければと思います。終わりましたら下のほうに集まっていたいただければと思います。

それでは、お願いいたします。

（分科会の日程及び進行の調整）

田中会長 分科会ごとのディスカッション、どうもありがとうございました。皆さんもう戻られたということで、本日用意しておいた次第は以上でございます。長い間いろいろと議論していただきまして、どうもありがとうございました。

これから評価活動も本格化していったって、去年やられた方はご存じだと思うのですが、暑い中、足立区役所までやって来て、議論をけんけんがくがくとやるというふうな作業が待っておりますけれども、どうか皆さん、お体に気をつけて、次の第3回の全体会でまたお目にかかれるのを楽しみにしております。

それでは、本日はどうもありがとうございました。

最後に事務局のほうから事務連絡がございます。よろしくお願いいたします。

（以下、事務連絡）

事務局（経営管理担当係長） 以上です。本日はまことにありがとうございました。

午後3時35分 閉会